令和２年 12 月号

みよし文化財だより

発行：文化財保護課（歴史民俗資料館）　電話 049-258-6655

「みよし文化財だより」は文化財保護課（歴史民俗資料館）が作成する不定期刊行物です。

～あなたの町の石造物 庚申塔 Part.1～

■石造物ってなに？

石造物とは、広い意味では石材を人の手によって加工したもの全般です。その中でも民間信仰と密接な関係のあるものは地蔵や、馬頭観音、狛犬など様々な種類があります。それらは道路の道沿いにポツンと建っている、お寺・神社の境内に建てられているなど、私たちの住む地域にもあります。それが建てられた目的や描かれている彫刻の意味などを知ることで、今まで知らなかった地域の歴史・魅力を発見することができます。

今回は、多くの地域で信仰され、建立されてきた「庚申塔」について紹介します。

■庚申信仰とは

1年の終わりが近づくとよく耳にする「干支」とは、実は略語であり、正式名称は十干十二支といいます。これは陰陽五行の木・火・土・金・水の陰と陽を元に作られた十干と年賀状にも用いられる十二支の語尾を合体させたのが干支です。干支の十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）と十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）との組み合わせは全部で 60 通りあり、昔の人々はこれを用いて、年だけではなく、日にちなどもあらわしていました。

「庚申（かのえさる）」とは干支では 57 番目、60 日のうちに一度巡ってきます。つまり約 2 か月に 1 回、一年では 6 回ほど巡ってきます。

※あくまで想像上の生物です。
参考文献：『太上除三尸九虫保生経』

庚申信仰の源流とされる古代中国の道教という教えには、「庚申の夜に眠ると身体の中に住む三尸（上尸・中尸・下尸）が、身体から抜け出て天に上り、天帝にその人の犯してしまった悪事などを報告し、寿命を削ります。三尸は人を短命にするので、長生きしたい者は庚申の夜は眠らずに、起きていなければなりません。」とあります。

この教えが日本に伝わり、平安時代の貴族の間で庚申の夜は眠らずに集まって詩歌・双六などの娯楽が行われていました。これを庚申待といいます。当初は貴族間のみでしたが、鎌倉時代に武家社会へと普及し、室町時代には、僧侶の手によって礼拝する本尊やその礼拝方法、庚申の功徳など仏教式に解説された『庚申縁起』という普及書が作られました。庚申信仰は僧侶・修験者・廻国行者などの全国を行脚する人々によって、次第に庶民の間でも普及し、北は北海道の礼文島、南は鹿児島県の竹島・悪石島まで及びました。

■庚申塔について

庚申塔とは、またの名を庚申供養塔とも言います。庚申塔が建立されるようになったのは、室町時代からであり、最古のものとして埼玉県川口市の実相寺に文明3年（1471 年）のものがあります。庚申塔が最も多く建立されたのは江戸時代です。江戸時代に庚申塔が多く建立されるようになったのには様々な要因がありますが、ひとつの要因として普及書の『庚申縁起』の中に、3 年間に 18 回庚申待を行った記念に建立すると記載されているため、それにならって建立されることが多いです。

庚申塔の種類には、「庚申」の文字だけのもの、主尊を表す梵字だけのもの、本尊の像容を彫刻しているものなど様々あります。ここでは、像容として多く彫刻されているものについて紹介します。

【青面金剛】

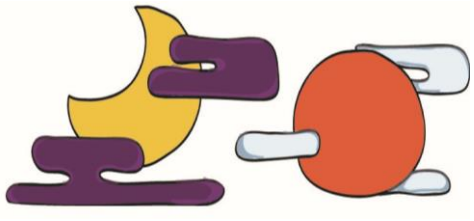
室町時代より仏教的要素が取り入れられてから、庚申塔では様々な本尊が彫刻されていますが、その中でも最も多いのは青面金剛とされています。

青面金剛は『陀羅尼集経』という仏教の経典では、身体の色は青く、頭髪は逆さ立ち怒りの形相をし、頭上にはドクロをのせ、身体には蛇をまとい、足元の邪鬼を踏みつけています。手は6本または4本あり、それぞれの手には、三叉戟・弓矢・宝輪・剣などの武具、またはショケラという女人像の頭髪をつかんでぶら下げている場合もあるとされています。

青面金剛は伝尸（疫病や伝染病）などの病気を払い除くご利益があります。現代と違って昔は、病気とは身体に住む虫が悪さをしていると信じられており、庚申信仰における三尸も同様のものと考えられていました。青面金剛は身体に住み着くそれらを払い除けることができるとされ、多くの庚申塔に彫刻されるようになりました。

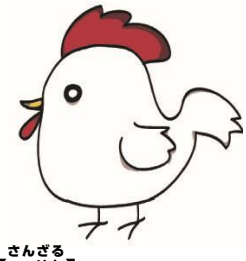
こうして、「庚申さま」と言えば青面金剛の怖い形相を彷彿させるほどに、人々に親しまれていきました。

【鶏・月輪・日輪】



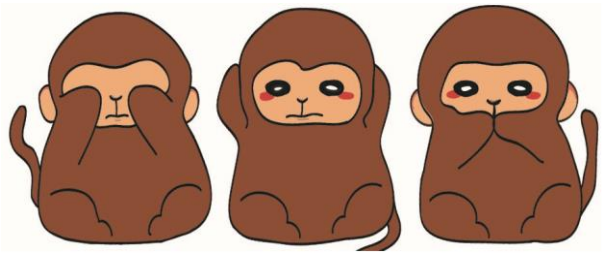
庚申塔には本尊以外にも、さまざまなものが彫刻されています。これら鶏・月輪・日輪は徹夜明けで朝を迎える様子を表したものとされます。

「月輪と日輪」は、夜の月から朝のお日様に代わる様子を表しているのに加えて、月待と日待という民間信仰があり、特定の日に人々は集まって月の出、日の出を待ってそれらを礼拝します。この信仰行事は庚申待よりも古くから行われており、その影響を受けたものと考えられます。



「鶏」は、徹夜した翌朝が酉の日であること、加えて鶏の習性から朝が来るとそれを告げるように鳴きます。そのことから朝を告げる鳥、朝告鳥とも呼ばれていました。昔の人々にとって夜は畏怖する対象であり、それを祓うかのように鳴く鶏は、朝の象徴であり魔除けとしても認識されていました。

【三猿】



三猿は「見ざる・聞かざる・言わざる」の様子を表しており、この三猿もよく庚申塔に彫刻されています。猿が彫刻されている理由は、庚申の「申」にちなんで彫刻されているから、または三尸が身体から抜け出て、天帝に自分の悪事を教えないようにとの願いがあり、三猿で　「悪事を見ざる・聞かざる・言わざる」と表しているのではないかなど諸説あります。

このように庚申信仰は、当初は貴族間のみで庚申の夜を寝ずに共に過ごす集まりとして行われていましたが、時代を経るにつれて、次第に庶民まで庚申信仰は普及し、それに伴って信仰だけではなく、人と人との交流の機会にもなりました。

次回 Part.2では、三芳町に現存している庚申塔について紹介していきたいと思います。（文・イラスト：木村）